

1920年代前半までの画家の造形的探究を踏まえて見るフランティシュク・クプカ作 《色彩による面、冬の記憶》

竹野 純（京都大学）

フランティシュク・クプカ (František Kupka, 1871-1957) は 1912 年のサロン・ドートンヌにて展示された《アモルファ、二色のフーガ》（プラハ国立美術館）において決定的となった様式転換によって、いわゆる抽象絵画様式を確立した最初期の画家の一人として知られるが、その画業に対する美術史的研究の蓄積は、ヴァシリー・カンディンスキーをはじめとして同様の資格で語られる他の諸画家に比して乏しい。アルフレッド・バー Jr. やリュドミラ・ヴァフトヴァーらによって画家の美術史的位置がおおよそ措定されて以後も、研究内容は神智学や無政府主義といったその思想的背景の解明や、未来派などの関連する美術史的潮流との比較など、1910 年前後の大規模な画面の変化を準備した状況を検証しようとする作業に集中しており、作品の成立過程を詳細に検討する場合であっても、その対象は同時期の作例にほぼ限られているため、特に第一次世界大戦後の作品に関してはまとまった考察がいまだなされていない状況にある。

翻って本発表は画家が様式転換後に最も旺盛な活動を見せた 1920 年代初頭までに制作された一作《色彩による面、冬の記憶》（同上）の成立を検討することを目的として企図されたが、その過程でより広く画業全体にも関わる次の三つの成果を得た。まず、多用される画面内のモチーフの由来と展開を追跡するために作業は画業初期まで遡る必要があったが、特に斜線のモチーフは 45° の角度に着目して初期の使用例にあたることで、その由来をスーラらも実践した世紀転換期の科学的美学の流行に帰した。第二に、1912 年の様式転換を跨ぐ諸作品の展開をこの斜線使用の観点から見直すことで、《秋の太陽》（同上）－《鍵盤、湖》（同上）－《垂直線の言語のための習作》（ティッセン＝ボルネミッサ美術館、マドリッド）－《大聖堂》（カンパ美術館、プラハ）の連繋と《湧出 I》（プラハ国立美術館）－《大聖堂の記憶》（シカゴ美術館）の連繋を炙りだし、この双方が表題作の成立の基盤を成していることを立証した。第三に、《大聖堂》に託された女性性や、《湧出 I》に潜まされた男性生殖器の描写を新たに指摘すると同時に、自作を生命体のように見立てて X 線写真の撮影や有性生殖といった現実とのアナロジーを適用することで制作を展開させる画家の独創的な発想を明らかにした。

以上の新たな知見を念頭に鑑賞しなおすとき、表題作がはじめて開示するのは性愛の恍惚の瞬間と生命の豊饒に向けられた画家の祝意であって、このことは従来から性愛の主題との関連が指摘されていた画家の他の数点の作品の系譜に本作もまた連なることを教えるものである。

様式転換後の制作の実態を解明し、抽象へ移行した画家の中心的関心の在りかをも照らす本発表の内容は、画家の今後の研究全般に裨益するものと考えらる。